

翻訳という苦行

渡 辺 正

科学用語はほぼ全部が外国語の翻訳で、一部は誤訳に近い。化学だと atomic weight は原子量ではなく「原子重」か……といった話を学生たちに語る際、ついでにこう問いかける。

「You are my teacher. を日本語にしたらどうなる？」

「想像のとおり大半は「あなたは私の先生です」と答える。それを受け、こう解説することになっている。——中学校時代の英文和訳はそれで満点だったし、いまま満点なのでしょう。でも、先生に向けて「あなた」と発語する日本人はいませんよ。You are my teacher. という英文はありえて、「ねえ教えてよ」くらいになるシーンなら考えられる。しかし翻訳で「あなたは……」とやったら、編集者が突き返すでしょうし、へたすれば次の仕事は回ってきません。日本語の単語をつなげていても、「あなたは私の先生です」が日本語じゃないからです。

四〇年ほど前から頼まれ仕事で数十点の訳書を出してきたが、翻訳はじつにむずかしい。ドイツの大博物学者アレクサンダー・フォン・フンボルトも、「翻訳はしよせん不可能なことこの試み」と書き残す。とはいえ翻訳という営みが尽きる

ことはないだろう。営みのなかで感じる苦しさを、他人の例も引きながら、思いつくままご披露しよう。簡単のため外国語は英語だとする。

専門の化学・物理・生物系教科書なら、原著の記述も平易だし、訳出に悩む場面は少ない。研究者や教員が書いた一般向けの本は難度が高く、高級な言い回しの処理に悩む（昔とちがってネット検索ですむことも多い）。ジャーナリストの書き物ともなれば、用語や表現をひねる人がいるため、かかる時間も労力も半端ではない。ある本で push という平凡な単語に引っかけたり、「ジャズを絶妙に演奏する」という意味の用法とわかって一件落着いたことがある。

さて翻訳の要諦は、①原著の自身を正しく伝え、②読みやすい日本語で書く、の二点だろう。①は英語の話で、不正確なら「誤訳」という。②は日本語の話になって、読みやすくないと「悪訳」の烙印が押される。むしろ「あなたは私の……」は②の失敗例にあたる。

①については私自身、「原著の内容を全部つかんだあと日本語で書く」のが翻訳だと思うため、想定読者には不要な簡

所の削除や、舌足らず的な箇所への加筆は適宜する。また、記述の順序が日本の慣行に合わないと思えば、パラグラフを入れ替えたりもする。どんな分野にも完璧なものなどなく、翻訳も「本の完成度を高める一作業」だと思うので。もちろん大幅な手入れをしたときは原著者の了解をとる。

①にからむ些事を少々。英和辞典は、単語の意味も用例も一部しか載せていないため、ぴったりの訳を考えるのに苦労する。一度だけ出版社が下訳を手配してくださったとき、single-lens reflective camera の素訳が「単一レンズ反射型カメラ」になっていた。意味はなるほど正しいものの、下訳者は「一眼レフ」をご存じなかった？ また、翻訳批評家・別宮貞徳氏の本にある話で、経済統計学の某教授が訳した本の小見出しに「ドー・ジョーンズは直降する」とあったらしい。原文の Dow Jones Plumets は、経済オンチの私にも「ドウ急落」だとわかる。そんなふうには日ごろの雑学は、翻訳で大いに役立つ。

①よりも②（日本語）がずっとむずかしい。なにしろ英語と日本語は語法がまるでちがうから、単語や句を置き換えて英文脈どおりに並べた「英語が透けて見える」逐語訳（直訳）は、日本語の体をなさない駄文になりやすい。そんな翻訳文を谷崎潤一郎は「化け物的文章」と評した。手元の訳書（現代物理学）にある「アインシュタインが行った講義の中で、彼は次のように述べ…」も化け物の類だろう。

化け物の宝庫はパソコン画面か。しじゅう現れる「更新プ

ログラムを構成しています」など、原文の見当はつくものの、いまもって私には意味不明な呪文のままだ。

日本語は主語述語の縛りが弱く、人称代名詞は省きがちで、名詞に単複がなく、時制もきびしく問われない。また文末が、現在系はウ段、過去形は「た」に揃ってしまう（英語にはない問題）。単調化を避けるため、過去のシーンでも一部の文末を現在形にしたり、形容詞や体言で終えたりと苦労が絶えない。

たとえば I am happy. は、日本語なら主語のない「楽しい。」で完全な一文になる。三人称なら「楽しそう。」だ。そのあたりに気配りせず、You を必ず「あなた」、He を必ず「彼」とした訳文は気色悪い（教科書にはほぼ無縁だが）。

英語でよく使う無生物主語も、直訳した文章は日本語から遠い。先ほどの別宮氏が、某訳書中の「規範にたいする著しい同調性が維持されている」という直訳透け透け文を、美しい「規範がおおよそ守られている」に手入れしていた。

翻訳と英文和訳は似て非なるもの——そこが苦しみの根だといえ、きれいな日本語に仕上げる作業は知的パズルだといつてよく（ボケ防止になる？）、うまくいったときの快感は何物にも代えがたい。およそ日本語でない訳書と仕方なく向き合うたびに気が滅入るのだけだ。

（わたなべ・ただし 東京理科大学教授、東京大学名誉教授）